

平安和文の役柄語（二）

登場人物のセリフの特性

関 一 雄

はじめに

物語文学の会話文は、物語という舞台上に登場して来る人物（役者）が相互に交わし合うセリフであり、地の文が描き上げる人物の動き（演技）と情景（背景）とそれらの時間の流れの中で、語り手によってすべてが実現する。語り手は、時には舞台上に黒子となって登場し、そのセリフや演技にコメントして、観客（聴者）を飽きさせない（いわゆる、草子地）。——このような考え方をすると、会話文の存在しない物語はなく、『源氏物語』以前の成立とされる『竹取物語』『うつほ物語』『落窪物語』等の会話の多さも自然に了解される。しかし、今更言うまでもなく、引用符号はおろか、句読点も濁点も付されない平安仮名文において、会話文は地の文とどのようにして読者（聴者）にはば誤りなく伝えられたのであろうか。

『竹取物語』にあつては、その冒頭文からほどなく、「おきない

ふやう」とあつて、それにづく文を読んでいくと、「とて」が出てくるので、「とて」の直前までが、翁のセリフであることが分かる。「いはく」の後に続く文でも、「といへは」が出てくるので、その直前までがセリフと分かる。その他、「侍り」「給ふ（下二段）」などの謙讓語、命令表現や意志・願望表現などが多く使われるところは、登場人物のセリフと判断されたのであろう。

このように、セリフであることをマークする指標は、貴族社会の出来事を、フィクションであれ、ノンフィクションであれ、地の文とセリフを描き上げていくことを基本とする文学作品にあつて、必要不可欠なものであり、実際に有効に機能している。

しかし、貴族社会から疎外されがちな庶民（「しもびと」）であつても、その物語に無くてはならない人物も少なからず登場するのが平安物語である。何よりも、先に挙げた『竹取物語』の「翁」もその一人である。賤民の翁が漢文訓読とは、およそ無縁の「漢文訓読語」を用いていることの理由は旧稿（存）で述べた。が、

ここで簡単に繰り返すなら、これまでに「漢文訓読語」と言われてきたものの中には「漢文訓読語」として、日本語の中に加わったものもあつたには違ひなからうが、逆にもともと日常的用語として使われていたものが、漢文訓読の際に用いられたものもあつたとしても、不自然ではなからう。

『源氏物語』の言葉が、日常的用語でないことは、夙に先学の説くところである。日常的用語は、会話文に多く使われるところであるが、ここに後者の「漢文訓読語」が、用いられることがあつたとするのが、本稿で改めて主張したいところであり、それを敢えて「役柄語」という未だ学界になじまない術語とともに、提唱するものである。なお、「役柄語」は、平安時代の日常的用語の追求のために用いる仮称であり、その為に、狭義の物語文学の用語に止まらず、『土左日記』『更級日記』等の用語も考察の対象とする。

役柄語Ⅱ『竹取物語』『うつほ物語』『落窪物語』『源氏物語』等の地の文には使われず、会話文に限って使われる語。会話主体が日常的に用いたであろうとされる用法(キャラ語と仮称)と、普段は日常的には用いない主体が様々な緊張した場面で、強い語気・語調で、意図的に発する用法とがある。

前者は、主として身分の下の者が、上位の聞き手に使うもので、場面によっては畏まり(卑下謙遜)に近い意味合い

を帯びることがある。後者は、上位の者が下位の者を叱責する意味合いを帯びることもある。

(注1) 拙稿『竹取物語』の用語と表現―「敬語」「和文語」「漢文訓読語」をめぐって―(『筑紫語学論叢』二〇〇一年)所収

(注2) 山田俊雄「和漢混淆文」(『岩波講座日本語』10(一九七七年)に、次のような説明が見られる。

「漢文の訓読によりて伝へられたる語法」が、「漢文訓読の作業の間には、オリジナルに発生した語(における文法)」という意味には解せないから(そう解すると、漢文訓読とは、新しい日本語の発生の契機になったということになる)、訓読自体の意味はきわめて深刻な事態をふくむことになる。「漢文訓読の際に、えらばれた、または初めて上層に浮上った、その時代の語の使用」という理解にたたねばならないはずである。(傍線は、本稿の筆者)

本稿は、この説明中の「その時代の語の使用」が、平安和文の会話部分にも反映されているという考え方に立つ。

(注3) 例えば、大野晋『源氏物語(古典を読む14)』(一九八四年)「王朝文学と言葉一 源氏物語と言葉」『語彙と文法』所収(一九八七)など。

一 接続詞・副詞の類について

そもそも

『土左日記』

○(旅の一行中の大人→童)「そもそもいかがよんだる」

(一月七日 三四べ)

【日本古典文学大系】による。以下同じ】

右は、大人が、童が詠んだという歌を知りたがって、語気を強めて尋ねる用法である。

『竹取物語』

○(翁→かぐや姫)「思ひのごとくも、のたまふ物かな。そもく、いかやうなる心ざしあらん人にかあはむとおぼす。(略)」

(貴公子たちの求婚 九べ)

【新日本古典文学大系】による。以下同じ】

『うつほ物語』

1 (真菅→殿守)「そもそも、この御正身はいかにぞ。御使朝に賜びつるは御まぼりものたてまだせむ」(藤原の君 ①一九七べ)

【新編日本古典文学全集】による。以下同じ】

2 (山伏→忠こそ)「(略)山林に交じる者は、世の中をおぼろげに思ひ離れて、身をなきものに思ひなしてするものなり。そもそも堪へおはしましぬべしやは」(忠こそ ①三三八べ)

『竹取物語』の1例も含め、右の3例は、下位の者が、上位の者に物事を尋ねる冒頭に「そもそも」を用いたキャラ語である。(行)

3 (仲忠→兼雅)「(略)からうじて思ひたまへ出でて、一手仕うまつりしを、そもそも、はかばかしうやははべりけむとだに覚えはべらず、今はましてかけても覚えはべらず。(略)」

(俊蔭 ①一一六べ)

右は、下位の仲忠が、上位の兼雅に対して用いており、キャラ語と言えよう。ただし、この例は前掲の例とは異なり、何事かを尋ねるのではない。文中で、後続の否定表現を誘導する用法である。「給ふる」「はべり」の使用とともに、卑下謙遜の気持ちを表していると思われる。

4 (正頼→忠こそ)「(略)あが君や、年ごろいかになりたまひけむと申しはべりつるに、かく悲しげにこそはものしたまひけれ。そもそもいかなる御心にてかは、かく思し立ちつらむ」

(春日詣 ①二七三べ)

会話主体の左大将正頼は上位であるが、この場面では、山伏になった忠こそに極めて鄭重に、言っている。「そもそも」は、この場面では下位の者が用いる用法に通ずる。

5 (兄の忠雅→弟の兼雅)「(略)そもそもいかにで止まりたまひしぞ。

いづくよりおはするぞ」(俊蔭 ①六〇六)

6 (兼雅→子)「そもそも、獸といへど虎、狼ならぬは住まざなり。鳥といへども鷲、山鳥ならぬは住まぬところに、何の御心にて、いとなききほどには宿りたまふぞ」(俊蔭 ①八八六)

「新編全集」では、「く住まざなり。」と句点を付すが、読点とし、文末の「く宿りたまふぞ」に係っていく用法と見るべきである。

7 (平正明)「略」東宮もいとあやしと思して、(東宮)「そもそもこの大将には、何の領かおはしますらむ。』(略)」

8 (朱雀帝→兼雅)「待ちたまへや。そもそも、こは眺かは。まだ明け暗れも光見ゆるものを」(内侍のかみ ②一七二二)

9 (藤英→忠遠)「略」さ殿にたばかりものせむ。そもそも、京に年ごろものしたまひて、世途の方はいかがせしめたまふ。 (略)「沖つ白波 ②三二二二」

10 民部卿、(実正→実忠妻)「そもそも女君はいかが生ひ出でたまへる。 (略)「(国譲中 ③一四五六)」

11 (仲忠→忠こそ)「琴ぞえ仕うまつり合はずまじかななる。そもそも、いとあやしくて、御行ひにつきたまひけるは、などてにて侍りけむ。 (略)「(国譲中 ③一八六六)」

右の5〜11例では、「そもそも」は、必ずしも使われなくとも文意は、通ずるものである。しかし、「そもそも」が用いられることにより、強い語気を伴う疑問表現となっている。

12 (正頼→典侍)「略」まづ湯参れ。そもそも何ぞ」

(国譲下 ③三八〇六)

右では、生まれた子が、男か女かを尋ねるセリフで、「そもそも」は欠かせない。

13 (季明→実忠)「略」そもそも、かの子ども持たりし人は、いづちかものしにし。男子ははかなくて失ひつめりき。 (略)」

(国譲上 ③二九六)

右は、父が子に、問い詰める場面で、叱責の意味合いも帯びている。

『篁物語』

○(兵衛佐→童)「略」この稲荷にて、まなこゝものしげに思へりし者ぞや。男よりのものぞや。そもそも御返り」(一七〇六)

【平林文雄「小野篁集・篁物語の研究」による。】

右では兵衛佐が、童に対し、女からの返事をもらって来い、と言っているセリフで、疑問から転じて、強い命令表現になっている。

『源氏物語』

1 (北山僧都↓光源氏)「略」そもく女人は人にもてなされて大人にもなり給ものなれば、くはしくはえとり申さず、かのをばに語らひ侍りて聞こえさせむ」(若紫へく)一六(三六)

【新 日本古典文学大系】による。以下同じ】

2 (夕霧↓玉鬘)「略」院は、げに、御位を去らせ給へるにこそ、盛り過ぎたる心ちすれど、世にありがたき御ありさまは、古りがたくのみおはしますめるを、(略)そもく女一の宮の女御はゆるしきこえ給や。(略)」(竹河へ四)二五七(六)

1は、僧都が光源氏に対し、鄭重に若紫のことに關して、答えるセリフに使われている。キャラ語としてよからう。2は、光源氏が、玉鬘に娘大君の冷泉院との結婚に關して、冷泉院の女一宮の母女御を引き合いに出して、強い疑問を呈する言葉として用いられたものである。

はなはだ

『土左日記』

○(播取)「けふ、かぜくものけしきはなはだあし」

(二月四日 四九六)

『うつは物語』

1 (仲澄↓仲忠)「はなはだかしこし。仲澄聞こえさせむと思ひたまへながら、御暇もなめれば、え聞こえさせずなむ」

(俊隆 ①一一九六)

2 (祐宗↓繼母北の方)「はなはだかしこし。年ごろも、宮仕へなども忙しくはべるうちに、仰せもなければ、(略)」

(忠こそ ①二二八六)

3 (仲澄↓仲忠)「はなはだかしこし。一夜の無礼はありもやしけむ。(略)」

(嵯峨の院 ①二九七六)

4 (正頼↓正明)「はなはだかしこし。例わづらひはべる脚病のわづらひてなむ、日ごろ、暇文奉りて参らずはべる」

(嵯峨の院 ①三一一一六)

5 (正頼↓東宮)「はなはだ尊き仰せなり。いと小さくなむ侍るめる。少し人とならばさぶらはせむ」と申したまふ。宮、「いとうれしきことなり。(略)」(嵯峨の院 ①三二六六)

6 (行政↓仲頼)「はなはだかしこし。などか久しう参りたまはざりつる」(吹上上 ①三八四六)

7 (松方↓涼)「はなはだかしこし。さぶらはむと思うたまへしを、手番のことなど侍りしかば、それに障りてなむ、急ぎ参上

りにし。(略)「(吹上上)①三八八ペ)

8 (涼↓仲頼)「はなはだかしこし。げにかくむつかしき所にのみ籠りはべれば、いとどつたなき心地するを、(略)」

(吹上上)①三九〇ペ)

9 (仲頼↓涼)「はなはだかしこし。あやしうものたまふかな。

(略)「などいふ。(吹上上)①三九〇ペ)

10 (仲頼↓正頼)「はなはだかしこし。粉河にいささか願果たさむと思つたまへて、紀伊国の方にまかりたりしを、(略)」

(吹上上)①四三二ペ)

11 (藤英↓忠遠)「はなはだかしこくかしこし。召し数まふること、入学して今年二十余年、いまだ左右の念に預からず。(略)」といはず。(祭の使)①四八七ペ)

12 (正頼↓東宮)「はなはだかしこし。例もわづらひはべる脚病の発動しはべりて、久しう内裏にも参らずはべりつるを、(略)」とて、(菊の宴)②二〇ペ)

13 (仲頼↓正頼)「はなはだかしこし。何事にか待らむ。殿の御大事に、思ほし障ることの侍なるになむ、承り驚きぬる」

(菊の宴)②三六ペ)

14 (忠遠↓藤英)「はなはだかしこし。いともうれしく、かくまで取り申したまひけること。忠遠、朝廷に捨てられたてまつりたる身一つをばさるものにて、老いたる親、小さき妻子の泣き悲しぶを見たまふるなむ、紅の涙流れて悲しく侍る」

(沖つ白波)②三二二ペ)

15 (忠遠↓藤英)「はなはだかしこし。殿にも急用ものせしめたまふらむ。いかでか」などいふ。(沖つ白波)②三二三ペ)

『うつほ物語』の1〜15については、5を除いて、「はなはだかしこし」という決まり文句、一種の挨拶語となっていることが、明白である。ただし、話し手と聞き手との関係は、聞き手が年上か、ほぼ同位、若しくは上位者である、ことが注意される。5の場合、正頼が東宮に言うセリフの冒頭で畏まっている言葉として「はなはだ」が用いられているところから、「はなはだ」自体に卑下謙遜の気持ちが含まれていると考えられるのではないが。「はなはだ」が、単なる〈非常ニ〉のような程度の高いことを表す語であったのではない。正頼が、続けて言う「いと小さくなむ侍るめる。」の「いと」とは明らかに異なる。また、それに応ずる東宮のセリフのなかにも「いと」とあって、「はなはだ」は、用いられていない。

このようなことに留意すると、『土左日記』の楯取のセリフの「はなはだ」も、身分の低い者が日常的に用いるキャラ語でありながら、日記の作者等に対し、一定の畏まりの気持ちも籠もっているという見方も可能性があるであろう。これに続く地の文で作者は罵って言う「しかれども、ひねもすになみかせたゝず。このかぢとりは、ひもえはからぬかたるなりけり。」と。身分は低くとも、

航海にかけてはプロである榎取へのいらだちが直截に述べられている。

『源氏物語』

1 (博士↓相伴役) 「おほし垣下あるじ、はなはだ非常に侍りたうぶ。かくばかりのしるしとあるなにがしを知らずしてや、おほやけには仕うまつりたうぶ。はなはだおこなり」

(少女△△二八四ペ)

2 (博士↓相伴役) 「鳴り高し。鳴りやまむ。はなはだ非常也。

(略) (少女△△二八四ペ)

『源氏物語』の右の例は、公卿に仕える立場の儒者が、「はなはだ」を用いた例として、ほとんど疑問なく扱われている例であるが、1の「侍りたうぶ」には諸説のあるところである。「はなはだ」が下位の者が畏まって用いたセリフであるとの、上述の私見によれば、「はなはだ」と「侍りたうぶ」は、話し手(儒者)の畏まりの表現として、共通点があることになる。

ただし

『竹取物語』

○(従者↓大納言) 「仰の事はいとまたうとし。たゞし、この玉、たはやすくえ取らじを。(略) (竜の頸の玉三三二ペ)

『うつほ物語』

○(俊蔭↓娘) 「略」わが領する莊々、はた多かれど、たれかはいひわく人あらむ。ありともたれかいひまつはし知らせむ。ただし、命の後、女子のために、け近き宝とならむものを奉らむ」

(俊蔭 ①四六ペ)

『竹取物語』の例では、下位の者が、上位の者の仰せ言に対して、尊崇の言葉を使った後で、そのキャラを表す「ただし」を用いているのに対し、『うつほ物語』は父が娘に自分の不甲斐なさを述べた後で、言葉を強めて、自分の出来ることを告げるところで、「ただし」を用いている。

すみやかに

『土左日記』

○(榎取↓神) 「略」みふねすみやかにこがしめたまへ」

(一月廿六日 四五ペ)

『うつほ物語』

1 (阿修羅↓俊蔭) 「略」いかに思ひてか、人の身を受けて、汝がここに來たれる。すみやかにそのよしを申せ」

(俊蔭 ①三五ペ)

2 (阿修羅↓俊蔭) 「略」忍辱の父母ありと申すによりて、四十人の子どものかなしく、千人の眷属のかなしきによりて、汝が命

を許したまふ。汝、すみやかにまかり帰りにて、阿修羅のために大般若を書き供養せよ。(略)「俊蔭 ①二六六)

3 (文人たち→藤英)「略)すみやかにまかりとどまりたまへ。いと不便なり。院をも追ひすてむ(略)「祭の使 ①四九一ペ)

4 (忠こそ→嵯峨院)「略)親を害する罪よりまさる罪や侍らむと、魂静まらずして、すみやかにまかり籠りて、山林を住みかとし、(略)年ころになりはべりぬ」(吹上下 ①五三五ペ)

5 (涼→嵯峨院)「略)涼五歳にて、熊野に詣で合ひて、山伏の申しはべりし、『略)きんぢこの手を伝へ施すものならば、この世になからむ世なりとも、訪ひ守らむ。すみやかに今は勇める獸に身を施し、深き谷に屍をさらしてむ』と申して、もとの山にまかり籠りにし。(略)「(吹上下 ①五三七ペ)

『うつほ物語』の1、4は、身分の低い者のセリフで、キャラ語である。ただし、1、3は、この場面では聞き手を見下ろした場面、聞き手の動作について使われた用法であるから、語気を強めるためのものでもあると、見られよう。特に、阿修羅が、俊蔭に言う1と2の例では、「申せ」「申す」「たまふ(四段)」は自敬表現であり、尊大表現でもある。これとは反対に4は、上位の者に対し、自らの動作に用いており、畏まりの表現である。5は、涼が院の帝に申し上げる言葉の中で、山伏が涼に述べた言葉を伝えるもので、やや複雑であるが、山伏自身の動作に関して用いた

ものであるから、畏まりの表現である、としてよからう。

このように、『うつほ物語』の「すみやかに」を見てくると、『土左日記』の楯取が神に向かって言うセリフの「すみやかにこぐ」は楯取の動作であるから、畏まりの表現であり、「はなはだ」の場合と同じである、と考えられる。^(手)

なお、「すみやかに」については、「とく」「はやく」との意味差にも注意しておかねばならない。『源氏物語』以後の例で、これまでの説明を補足したい。

『大鏡』

○(道長→皇后宮の妹)「さらなり、みなきゝたる事なり。いとふびんなることにこそはべるなれ。いま、しかすまじきよし、すみやかにいせん。かくいましたること、あるまじきこと也。人してこそいはせ給はめ。とくかへられぬ」(一 師尹 一一二ペ)

【『日本古典文学大系』による】

【イウマデモナイ、ミンナ聞キオヨシデイルコトダ。タイソウ気ノ毒ナコトデス。今スグ、ソノヨウナコトノマカリナラヌ旨ヲ、敏速ニ伝エサセヨウ。コノヨウニ自身デ来ラレタコトハ不心得ナコトダ。人ヲ介シテオシヤツテホシイ。即刻オ帰リナサイ】

皇后宮の妹が零落し、所領の回復を道長に直訴したのに、道長が戒める言葉である。「すみやかに」は〈遅滞無く敏速に〉の意であり動作について用いられ、後続の「とく」は〈即刻〉の意で時刻についていう使い分けがなされている。なお、「はやく」は動作の「速度」についても、時刻の遅速についても、言う。「すみやかに」は「はやく」の意味の中で、動作の速度を如上のように限定して表す語である。

もはら

『うつほ物語』

1 (正頼↓仲忠)「わがぬしを酔はしたてまつるも、心ありや。酔ひて、もはらしたまはねば、本性現はしたまへとぞや」

(俊蔭 ①一一五ペ)

2 (東宮↓正頼)「略」時々聞こゆれど、もはら聞き入れたまはぬやうになむ」(嵯峨の院 ①三三六ペ)

『落窪物語』

1 (継母↓落窪姫)「まづ外の物をし給ひて、こゝのをおろかに思ひ給へる。もはらかくておはするに、かひなし。あな、しらくゝしの世や」(巻一 一七七ペ)

【『日本古典文学大系』による。以下同じ】

2 (典業助↓惟成)「今日の事はもはら情なくせらるまじ。打杭うちたる方に立てらばこそさもし給はめ、向ひに立てたる車をか

くするはなぞ。(略) (巻二 二六四ペ)

3 (北の方(継母)↓夫(大納言))「略」子供をこそ我に孝する事なかりきとて思し捨てめ、世の人の親は、もはら幸なきをなん、なからむ時にいかにせんとは思ふなる。(略)」

(巻四 二二一ペ)

「そもそも」「はなはだ」「ただし」「すみやかに」の例は男性のセリフである。(ただし、「そもそも」の『土左日記』の例は、男性とは断定できない。女性の大人の可能性もある。)この「もはら」は『落窪物語』の、1と3は、女性である。身分の上下について見ると、『うつほ物語』の二例は上位者から下位者へのもので、問題ないが、『落窪物語』の1と2は、この場面では上位者の立場からのセリフであり、3は、下位者から上位者へのセリフである。この物語では北の方(継母)は、徹底的な悪役を演じている。「姫への」苛酷な労働の強制、性的暴行未遂、監禁と言うさまざま、(略)ラストで反省して善人になったりせず、みなが仲良くなって大団円にむかって、一人で憎まれ口を叩くあたり、現実味があって苦笑いした。」(松本侑子「三人三様の女たち、継母、姫、あこぎ」へ「新編古典文学全集」月報65より)は、この物語の読みの深さを感じせしめる。「もはら」は、北の方のキャラを表す語の一つとしてよからう。

『源氏物語』

○(母尼)「略こゝに月ごろ物し給める姫君、かたちいとけうらに物し給めれど、もはら、かやうなるあだわざなどし給はず、埋もれてなん物し給める」と我かしこにうちあざ笑ひて語るを、(手習)〈五〉三五四(六)

右の「母尼」は、横川の僧都の母で、引用の会話中の「姫君」は、浮舟である。老女のセリフに用いたものであるが、『源氏物語』中の他の四例は、律師(夕霧卷)・左近少将(東屋卷)・仲人(東屋卷)・常陸介(東屋卷)であるので、「新大系」のこの脚注に、「男性用語」とするが、この四人に共通するのは、身分のそれほど高くないもの」ということである。従って「男性用語」ではなく、右の母尼も含め、身分の高くないことを示すキャラ語とすべきではないか。

(注4)『うつほ物語』1の聞き手の「殿守」は、「あて宮」の侍女であり、その身分は低い。が、「真菅」のセリフは、実際の聞き手の背後にある「あて宮」を意識したものである。

(注5)「そもそも」について、吉田金彦・築島裕他編『訓点語辞典』(二〇〇一年)の「訓点語彙」の一項で取り上げられ、『源氏物語』の右の二例について「漢文の素養のある人物の言葉の中で用いられている」と説明し、『竹取物語』などの例も「訓読語の影響と考えられる」と説明している。しかし、前掲の例の通り、漢文とは無

縁の竹取翁や『うつほ物語』の様々な人物のセリフに用いられる役柄語として、見直されるべき性格のものである。

(注6)「侍りたうぶ」については、杉崎一雄『平安時代敬語法の研究——かしこまりの語法』とその周辺——(一九八八年)の第六章・第七章に詳述されている。その第七章の一節に「侍りたうぶ」という表現は、直接の話し相手はとにかくとして、貴人・尊者の御前で用いる、四角ばったことばづかいの一つであるというようにその場面を捉えなければならない」と説明がなされる。また、桑田明『けり』と敬虔語の考察(二〇〇四年)では、「敬虔語」という新観点からこの語法の「侍り」を捉える。「はなはだ」の用法はこれに類する一面があるのではなかるうか。

(注7)楳取のセリフ中の「はなはだ」「すみやかに」についての比較的最近の説は、平沢竜介『古今歌風の成立』(一九九九年)の第二章第二土佐日記における訓読語——貫之の使用意図——に見られる。同書の説は遠藤嘉基「貫之の文体と表現意識」(一九六六年)を修正的に援用し、「かちとりの権威的な態度を批判的に表現しようとした書き手の意図を感じとることができるように思われる」とあり、「新編日本古典文学全集」の土佐日記の頭注にも採用されているが、他の作品の用法をも考慮に入れないあまりにも主観的・恣意的な考えである。

(未完)

* 平安和文の役柄語(二) (梅光学院大学論集) 第41号(二〇〇八年一月)に掲載